

# ねりま小中一貫教育レポート

〇●〇 第 11 号 〇●〇

平成 24 年 12 月

発行：教育企画課・教育指導課



11月27日、練馬文化センター大ホールにおいて「第一回 ねりま小中一貫教育フォーラム」を開催しました。当日は、千人近い区立学校の先生方をはじめ、PTA・学校評議員や他区市教育委員会の方など約1200の方が参加しました。沖縄や九州など遠方からの参加もあり、盛会となりました。

## ◆第一部 研究グループ・大泉桜学園の発表および講評

10組の研究グループおよび大泉桜学園が取組の成果と課題などについて発表を行い、千葉大学教育学部の天笠茂教授から講評をいただきました。

講評では、発表全体を通して6点のご示唆をいただきました。

### (1) 学校間の距離を踏まえた創意工夫

施設分離型で小中一貫教育を進める際には、学校間の距離などの地理的環境を踏まえて何ができるか、というアイデアを出すことが求められる。

各研究グループは、教育委員会が定めた基本的な方向性を受けて、中学校区ごとの方針やカリキュラムなどの形を整えている段階である。整えた形にどう魂を込めていくか、何に重点的に取り組むのか、学校のやる気や主体性が今後重要になってくる。

### (2) 小中一貫教育の基本的方針・計画立案

小中一貫教育の取組を進めるうえで、どういう計画のもとにこの取組があったのか、時間があれば、取組に至るまでの段取りも聞きたい。基本的な方針や計画がぐらつくと、取組もうまくいかない。

### (3) 推進の核となる組織的な取組

それぞれの研究グループや学校で、誰が小中一貫教育を推進していたのか、推進チームがどう形成され、どういう課題を乗り越えて今日に至ったか、そのあたりも機会があったら発表してほしい。たとえば、乗り入れ授業のためにどういうシステムを作ったか、そのプロセスに意味がある。

小中一貫教育は一人では進められず、小中連合の推進チームを作る必要がある。すべての先生が何らかの形で関わるシステムをどう作るかがポイントとなる。

#### (4)小中一貫教育の相乗効果

小学校・中学校が単独では達しえない効果を生むことが、小中連携のめざす姿でもある。小中お互いの頑張りが、相乗効果を作り出し、2校・3校相互の関係で一段も二段も教育的な環境が高まっていくような連携をめざしてもらいたい。

#### (5)保護者・地域との連携

中学校区という地域には、保護者の方がいて、幼稚園・保育園などの教育機関もある。互いにつながりながら、中学校区をより豊かにしていきましょう、という気持ちで、地域とともに、保護者とともに小中一貫教育を進めていくことが大切である。

#### (6)教育委員会の方向性の明示

小中一貫教育は、教育委員会と学校が呼応する形で進めていく必要がある。教育委員会は、次の段階への方向性・展望を明示しなければならない。その質を担保するのが学校となる。

### ◆第二部 シンポジウム「施設分離型 小中一貫教育を考える」

コーディネーターに千葉大学の天笠教授、シンポジストに目白大学の小林福太郎教授、小学校保護者、研究グループの先生方をお迎えして、施設分離型で小中一貫教育を進めるうえでの成果や課題・今後の方向性などについて意見交換をしました。



保護者の高岡様からは、「先生方が一生懸命やっていることが保護者には見えない。小中一貫教育に限らず、研究授業で様々取り組んでいても、保護者には何の研究をやっているか伝わらない。もっと保護者に発信してほしい」とのご意見をいただきました。

豊玉第二中の北村先生からは「研究を始めて、まず自分自身の授業が変わった。小学校で何を教えているかを意識するようになり、中学で何を教えればいいのか、と考えるようになった」、下石神井小の鈴木先生からは「交流授業や協力授業で、中学校の先生と授業について話し合うようになり、専門分野のことも教えてもらえて学ぶ機会が増えた。気になる子供が小学校を卒業してからどうなったか、子供の成長をみることができるようのも意義が大きい」との発言がありました。

小林教授からは「小中一貫教育では、子供たちの活動をやらなければならない、と思いがちだが、分離型で距離があるなか、交流する意味がどれだけあるかを考える必要がある。活動レベルよりも内容レベルで連携し、お互いのきまりを見直すとか授業づくりで構築段階から連携するとか、地域の実態にあわせて独自のものを切り開くことが大切である」とのご助言をいただきました。

天笠教授からは「施設分離型は校長先生が別々なので、校長先生の連携・協力がポイントであり、中学校区の教育の質を左右する」とのコメントをいただきました。